2008 アルゼンチン研修レポート

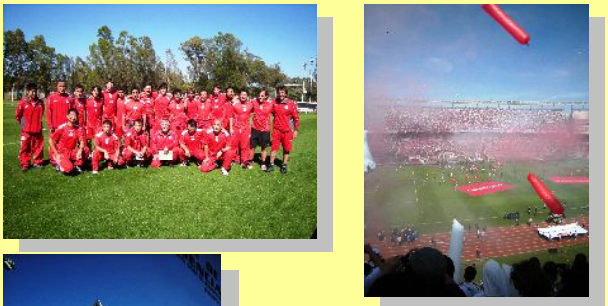
清水エスパルス　アカデミー育成センター長　池谷　孝

CONTENTS

Ⅰ. 11の視点（まとめ）

Ⅱ. TOPICS

1. メンタリティ
2. 日本サッカーへのヒント
3. コーチの評価の違い
4. 選手育成について
5. トレーニングプログラムのモデル



Ⅱ. INFORMATION（その他）

1. アルゼンチンプロクラブの育成組織
2. バティスタ氏との懇談
3. クラブ ESTUDIANTES の概要
4. クラブ GIMNASIA の概要
5. クラブ ROSARIO CENTRAL の概要
6. バビーフットボール
7. 育成年代のゲームの印象

2008. 10. 16－27

Ⅰ．11の視点(まとめ)

1. ゲームに必要な技術を十分に身につけさせる

育成前期の15歳くらいまでは技術をたっぷり教える。技術・判断力・動き。
技術とは、ゲームに必要な技術、ゲームで活かせる技術。

2.「技術」と「ゲーム」を中心としたトレーニング。

習得した技術を、目的あるさまざまなゲームで発揮させる。ゲームを通してゲームスキルを習得する。

3. 育成プログラムの確立と見直し

技術から戦術につながるカテゴリーごとの育成プログラムを一貫性あるものとして確立する。
コオーディネーション、フィジカルを含んだ 1 年、1 週間、1 日のトレーニングの組織化をする

4. 自分で考え自己分析し自己の力で伸びていく選手を育成する

ゲームやトレーニングを最大限利用しながら、子どもたち自身が目標に向かって自ら考え、自分の特性を見極め、自らの工夫と力でたくましく伸びていくことを促す指導。指導者主導ではない。

5. 勝利のメンタリティの養成

育成後半からは、勝利のメンタリティを植えつける。ユニフォームのため、クラブのために魂をこめて死に物狂いでゲームを戦う選手の育成。

6. たくさんのゲーム経験を積ませる

真剣勝負の場であるカテゴリー別リーグ戦の構築とカップ戦の有効利用。

7. コーチの育成

経験主義に陥ることなく、さまざまな研修や人間としての経験を積み、社会の変化、子どもたちの変化に対応し常に最善の指導ができる指導者の養成(急務)。人間教育できるコーチも育成。

8. ピッチ外での子どもの成長を阻害する要因を取り除く

子どもたちが抱える問題（学習や家庭、精神的問題やケガ、人間関係など）を解決する組織設置。
医師、理学療法士、精神科医（心理学者）、ソーシャルワーカー(社会福祉士)、歯科医など。

9. 特別な才能を持った選手の育成・特別なポジションの選手の育成

個人種目の選手として捉え、個を認め個として接する指導者の感覚も必要(たとえばストライカー)。
特別なトレーニングの時間を確保する必要がある。

10. タレント発掘のためにスカウトの数を増やす

もれなく、早期に発掘、しかし育成は慌てずゆっくりと。タレント発掘のノウハウに注目。

11. コミュニケーションの重要性を理解する

ピッチ内での指導クオリティ維持。目的、理由をわかりやすく伝える指導。指導者の一方的な指導ではなくコミュニケーションをとりながら信頼関係を基盤にしたよい雰囲気での指導。選手間の日常的なコミュニケーションも大切。

Ⅱ. TOPICS

1. メンタリティ・・・選手が伸びていく触媒としてのメンタリティ

■日本とアルゼンチン、勝利のメンタリティとタレントの輩出

強いメンタリティと技術が選手自身を育てる

以前、U-20 ワールドカップカナダ大会優勝のアルゼンチン代表監督のウーゴ・トカリさんが J リーグのセミナーでみえたときに、「技術だけをみたら日本のU-12 年代の子どものレベルは高い」「アルゼンチンのサッカー選手は生まれながらにして勝利のメンタリティがある」とおしゃっていました。また、アルゼンチンへの日本人のサッカー留学生を支援している知人によると、現地でのジュニア年代の日本の子どもの技術の評価は高いけれど、ジュニアユース、ユース年代になるとサッカー選手としての評価はガクッと落ちてしまうということでした。さらに彼は、アルゼンチンの 8 歳のインファンチルからアマテウ（ジュニアユース、ユース年代）まで、ゲームに入る前のロッカールーム、ベンチ、ゲームの雰囲気、選手の審判に対するクレームのつけ方など子どもたちのひとつひとつのしぐさや行動、気持ちの入れ方、緊張感すべてがトップと同じかそのミニチュアであるということ、それに比べ日本の子どもたちはカテゴリーによって別物になっている気がするといっています。言葉としては簡単に語られてしまう技術とメンタリティ、これらは私にとって大いに気になるところであり、なにか本質的なものがあるように思います。

自分の特性を見極め、自分を伸ばすために考え続ける選手

私が観たトレーニングは、2 名以上の指導者（コーチ）がいて、トレーニングはごくシンプルに行われていました。ジュニアユースやユース年代のコーチは、指導を通して選手に寄り添いながら、たくさんいる選手の中の何人かの選手が自分の力で伸びてくるのを待ち、選手は選手で自分の目標に向かって自分自身の力で伸びていく仕組みがあることを強く感じました。つまり、最近の日本の指導現場でまま見られるように、トレーニングメニューを懇切詳細に組み、丁寧な指導の中、選手が、指導者のメニューをこなせば自然に自分が（全員が）うまくなるであろうという曖昧漠然としたムードとは本質的に異なるものであると思いました。まさしくメンタリティの問題であると感じます。

メンタリティの問題は一朝一夕で語れるものではない厄介なものだと思いますが、メンタリティは触媒であり、技術と同じようにタレントが育っていく大きな要素であることは間違いありません。アルゼンチンでは、小さい頃からゆとりをもって技術をたっぷり教わったあとの育成年代後半になると、選手は厳格に淘汰される世界に生き、

彼らはゲームやトレーニングの場を与えられることによって生まれついての？強い（勝利の）メンタリティを活かしながら、その「場」を自分自身で最大限利用して自分のプレースタイルを確立しながら自力で未来を切り開いていく環境になっていると思います。指導だけに依存するのではなく、淘汰という厳しい現実の中で常に危機感を持たざるを得ない環境に身をおいているのだと思います。そういう環境の中で、言われたことをやるのではなく、自分に何が必要か、何をすべきか、どうやればいいのかをいつも考えてサッカーをしているように思います。

ひるがえって日本はどうだろうかと考えます。先ず、日本には各カテゴリーの指導者によって、教えすぎと教えなさ過ぎの2極があるように思います。たとえば判断と技術に関して。これは育成の一貫性やピラミッドの形成が未熟であることと無縁ではないはずです。また、U-12 種年代の指導のばらつきや各カテゴリーごとの拮抗したチーム同士の(熾烈な)リーグ戦環境の未整備は、選手の長期的育成や指導者のクオリティと指導力向上に影響を与えていると思います。加えて、トップタレントの育成に限って言えば、全員を伸ばすような平等的風土や中盤の選手ばかりが育つような平均的画一的指導方法も少なからずマイナスに影響していると思います。世界的なストライカーや GK が出てこないのはこうしたことも関係するかも知れません。

指導者の役割

さらにある意味（決して間違ってはいないと思うけれど）、指導者主導でトレーニングを行うことが、選手が指導者に依存し、目標を自ら定め自分自身で自立して自分のサッカー選手としての未来を切り開いていくメンタリティの萌芽をスポイルしていることにはなっていないでしょうか。それは、北京オリンピック代表監督バティスタさんやロサリオの U-17 監督マルセロさんのいう、「いざゲームになったらユニフォームやチーム、クラブのため、国のために魂をこめて死にもの狂いで戦うべきである」、「アルゼンチンの選手は競技上に入ったら勝利のメンタリティを持って戦う」「日本人はゲームで生ぬるい」「日本との差は技術ではなくメンタリティである」という言葉につながっているように思います。

こうして考えていくと、日本では自分で考え続け、自分の課題と自分のやり方を見つけ目標に向かっていく選手がまだまだ主流ではないように思います。個性を伸ばす重要性が指導者側の視点からよく言われますが、むしろ子ども（選手）自身が自己分析し自分の特性を見つけ自己力で伸ばしていくことに指導者は強く働きかけるべきだという思いを新たにしました。サッカーが個人の集合体のゲームであるとするなら、個人を育てる環境や指導、トレーニングが必要ですし、選手の個人主義的な側面に対する指導者側のある種の我慢や寛容が必要であるとも考えられます。ストライカーの育成などはまさしくそれに当てはまると思います。

また、日本全体の育成の焦点がまだ曖昧な状態であると言えないでしょうか。プロになる選手はほんの一握りですから、育成年代の選手にさまざまな選択肢があることはよい面もたくさんあります。しかし、育成のピラミッドは明確である必要があります。学校スポーツから流れ出る育成とプロフェッショナル育成の流れをうまく融合させながら、J クラブは J クラブで、協会は協会で、育成の方法およびターゲットや発信する情報を整理分別する必要があるように思います。

最後に、日本とアルゼンチンの社会環境の違いは大きく、手をつけられない究極的な問題であるかも知れませんが、タレント育成とメンタリティの問題を分析し世界基準の方法や情報を視野に入れながら、J クラブが今できるアプローチを特定し J クラブにしかできないアクションを起こし、よりよいシステム作りを進めることが必要だと痛感しました。

2. 日本サッカーへのヒント:アルゼンチンにあるもの日本にあるもの

アルゼンチンサッカーにあるもの

・育成ピラミッド:
　バビーフットボール(U-6～U-11) 、インファンチル(U-11～U-13)、アマテウ(U-14～U-20)
・有効な育成の組織:ON,OFF での選手のケア体制
(育成 DT、監督、コーチ、フィジカルコーチ、GK コーチ、医師、栄養士、心理学者、ソーシャルワーカーなど)
・育成プログラム(カテゴリー、スケジュール、発育発達、個人に応じたプログラム)
・カテゴリーごとの熾烈なリーグ戦による長期的な育成(MーTーM)
・選手の発掘システム、多くのスカウト
・受け皿の多さ(多くのクラブ)
・実力をアピールする場所(リーグ戦)
・選手が安心してクラブでサッカーに打ち込める環境
・選手が自らトップを目指す強烈なメンタリティ・勝利のメンタリティ
・選手自身が与えられたトレーニングやゲームの場を最大限生かしてトップを目指そうとする雰囲気
・選手自身が工夫し身につけたプレー(自分で自分を伸ばす)
・迷いなくやりきるプレー
・選手の頻繁な入れ替えとそれに伴う選手自身の危機感。
・多くのベテランコーチによる指導
・・・①選手が伸びていく邪魔をしない②選手自身が伸びていく場を与える③個別指導
・医科学的かつシンプルなトレーニング・指導より淘汰のためのトレーニングとゲーム〔育成後半〕
・サッカーが身近にある。サッカーを観る機会が多い。あらかじめ観たサッカーのイメージを持ってプレーする
・ストリートサッカーの減少、親の期待や干渉、勝利至上主義の価値観増
・学業も重視

日本サッカー全体にあるもの

・世界に追いつこうとする意欲
・サッカーがすべてではないということ
・トーナメント中心のゲーム(もしくは大会の伝統)
・カテゴリーや指導者による2極化・・・教えすぎと教えなさ過ぎ〔判断の領域と技術に関して〕
・複雑詳細なメニューと懇切な指導によって身につけたプレー、コーチ主導のサッカー
・教えられて身につけたプレー
・若い指導者による指導
・多角的育成といくつかの進路の選択肢〔プロ、JFL、社会人、大学生〕
・漠然とした底上げ(平均的)的指導。ボトムアップかプルアップかが明確でない。全員に注目して指導
・ぬるま湯的なゲーム(散見される)
・3 年ごとの選手の入れ替え
・学校体育でのスポーツ経験、運動能力技能の習得

3.コーチの評価の違い（推測：日本とアルゼンチン）

□選手をトップ（上のカテゴリー）に上げる（タレント育成：プルアップ）
・・・アルゼンチン（極めて明確）VS 日本（曖昧）
□試合結果（大会結果）
・・・アルゼンチン（あまり影響しない）VS 日本（かなり影響する場合あり）
□全員を底上げ（ボトムアップ）
・・・アルゼンチン（意味を持たない）VS 日本（なんとなく意図する）

4.選手の育成について（アルゼンチンから学ぶこと）

・15 歳前後までは急がず慌てずしっかりと技術を習得させる。
・各クラブにビジョンと将来像および選手育成、トレーニングの全体を網羅した明確なプログラムが存在する。
・育成やトレーニングには固定された科学的トレーニングのシステムが必要である。
・指導者のクオリティが必要。サッカーを熟知している。サッカーしか教えられない指導者ではない。
・タレント発掘のノウハウを持った多くのスカウトが多く必要である。
・機能的組織・・・ピッチ上のみならず医学、心理学、栄養学、社会福祉学の観点からのスタッフが必要。
・育成費が必要・・・クラブ予算の5パーセントから10パーセント。
・そのクラブ独自の特別な工夫やプログラムが必要・・・オリジナリティ。勝つクラブ、育てるクラブ。世界と戦う準備と情報、そして独自性の2つのアプローチ。
・忍耐が必要・・・指導者もクラブもあわてて選手を育成するのではなく徐々に選手に課題を与えていく。
・うまい選手ほどたくさん練習している。

＊注）整理された内容としては、後述のバティスタ氏との懇談の項が参考になると思います。

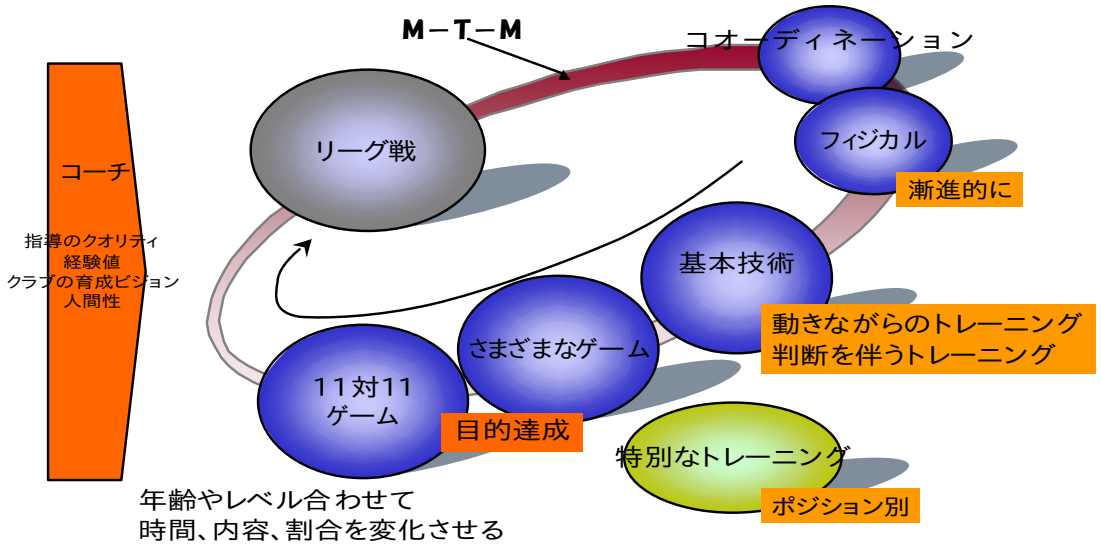
5.トレーニングプログラムのモデル：GIMNASIA（ヒムナシア）のトレーニングの組み立て

▽コオーディネーション（毎日行う）
▽フィジカル（年齢に応じて負荷を調整する。スピードも重要視）

▼基本技術のトレーニング
▼さまざまなゲーム形式のトレーニング（目的に合わせた設定）
▼11対11のゲーム
▼＋特別なトレーニング・・・ポジショントレーニング（ストライカー、GK など）

＊年齢に応じて各トレーニングの時間配分を調整する
＊ポジションのプレー、エリアのプレー、シチュエーショントレーニングも重要視したトレーニングを行う。
＊経験と知識を与えるためのトレーニング、ゲームを通した技術の発揮と判断力の養成を行う。

トレーニングの構成（ヒムナシアのモデル）



コーチの役割
・サッカーと育成を熟知
・トレーニングの場を与える
・ひとりひとりの技術を修正する
・デモンストレーション
・効果的な言葉掛け
・強いメンタリティを求める
（クラブのため、ユニフォームのためにゲームを戦い、勝つ）
・左右の足でトレーニング
・さまざまなサッカーを経験させる
・教育にも配慮

選手の取り組み
・自分でしっかり考え、自分の課題、やり方を見つけ、自分の特性を見極める。与えられたゲームやトレーニングの場を最大限利用して上を目指す

選手のサポート
・監督（技術コーチ）
・アシスタントコーチ
・GK コーチ
・フィジカルコーチ
・医師
・理学療法士（整骨士）
・精神科医（心理学者）
・ソーシャルワーカー
（社会福祉士）
・歯科医

コオーディネーショントレーニングの留意点（＊2008J リーグキッズ研修会での資料より参考）
・両側性（左右の動き）
・短時間のトレーニング
・変化のあるトレーニング
・複合した動き（さまざまな動き）・
・差異化（いろいろな道具を使って）

・オートマチックよりリアクションのトレーニング
・観る、反応する、からだを動かす

Ⅲ. INFORMATION(その他)

1. アルゼンチンプロクラブの育成組織

■INFANTIL:インファンチル(カテゴリー1)
12 軍(11 歳)から 10 軍(13 歳)まで 1 歳ごとのカテゴリー

■AMATEUR:アマテウ(カテゴリー2)
9 軍(14 歳)から 4 軍(19 歳 20 歳)まで 1 歳ごとのカテゴリー
いずれも各 30 名で年間 35 ゲームのリーグ戦がある。リーグのエリアおよびゲーム時間はカテゴリーによって異なる。

2. バティスタ氏との懇談(U-23 北京オリンピック優勝監督)

■育成の成功のために
ステップバイステップ、ひとつずつ積み重ねる。飛び級はしない。

■育成の要点
▽U-11、12
年齢が小さければ小さいほど技術中心に。体力は重視しない。
▽U-14、15
技術中心。競争のために少しずつ戦術を教える。
▽U-17
選手としての完成を目指す

＊戦術、体力が優先しないように配慮している。基本技術や新しい技術を習得することを重要視する。

■日本の選手たちとの違い
歴史や生まれ持った勝利のメンタリティをベースに、サッカーをよく知っているからゲームに必要な技術をスムーズに教えられる。サッカーがうまければよいというのはだめで人間としてしっかりしていなければならない。一旦ゲームになれば相手をリスペクトすべきではない。U-13 くらいからは、ユニフォームのため、チームのため、クラブのために魂をこめて死に物狂いで戦う精神が必要である。その覚悟がなければ世界では勝てない。

■アルゼンチンの子どもたちの変化
昔はサッカーしかなかったが、いまはさまざまな遊びや携帯ゲームもあり、サッカーを楽しむことが少なくなった。ポツトレイロ(ストリートサッカーも減少している。昔は放っておいても選手は自分で伸びていったが、今は指導者が上を目指せとハッパをかけなければならないことも起こっている。また、結果主義、勝利至上主義が蔓延しつつある。育成にとってはよいことではない。

■育成が成功しているクラブ
クラブ名・・・ラヌース、ボカ・ジュニアース、エスティディアンティス。
要因・・・育成ダイレクターが優秀である。育成で子どもを急がせていない、段階的指導が行われている(ステップバイステップ)。コーチの身分が守られている。コーチが育成の考え方の幹を共有している。

■サッカーは攻撃的にやることが重要

■楽しくサッカーをすることが大切
子どもを大人のように扱って指導することはいけない。楽しいサッカーとは、ほったらかしにするのではなく、責任を持って教え楽しくプレーさせること。

■速い判断をし反応させるためには
狭いエリアでゲームを行うことが有効である。

■U-8 のサッカー
団子サッカーは OK。少しずつ広がりを教えていく。小さい子どもには小さいボールが適切（足の大きさにあったボールサイズ）

■U-10 のサッカー
ポジションの仕事を教えなければならない。しかしこれは、ポジションに固定することでもなくシステムを与えることでもない。

■コーチの責務
小さい子どもはコーチを信用しているからそれに応えなければならない。

■勝利至上主義の流れに対して
大人のゆとりが必要。子ども時代には子ども時代にふさわしいゆとりが必要である。
保護者からのプレッシャーや過干渉を排除してやる必要がある。

■勉強とサッカー
学校に行ってこそのサッカー。文武両道を目指すことが大切である。

■タレントを見分ける視点（10 歳の子どもからタレントを選ぶとしたら）
技術のみを見る。家庭の状況。一定以上の技術があればポジションの特徴、長所も見る。

■U-23 北京オリンピック優勝の要因
技術的にすぐれた選手がいたから。誰をどのポジションにするのかを見極めた。チームワークを重視したが、コーチの団結力、選手の団結力があった。メッシも全員の中の一人の選手であった。合宿の 23 日間、規律を決め、よい雰囲気で生活できるように配慮した。一人ひとりがよい選手だったので何か新しいことを教えることはなかった。決定は監督がするが、監督に対して明確に具申できるコーチがいた（4 つの眼のほうが 2 つの眼よりよく見える。監督が見ていないところをコーチが見ている）。

■アルゼンチンのサッカー選手は、勝利のメンタリティを持って土の中から生まれてくる。

■メンタリティ
12、13 歳から徐々にメンタリティを重視していく。12 歳以前のメンタリティはあまり重要視しない。

■天才も育成が必要
メンタリティを教育する。目標を示し責任を持たせる。

6、7 歳の頃は天才かどうかはわからないが教えているうちに現れてくる。メッシもマラドーナも左足しか使えないことを考えると右足の技術を教えなかったのは指導者の責任である。特別扱いは間違っている。時間をかけて育てていくことが必要。飛び級はなし、ある年齢まではお山の大将でいい。より高い目標を持たせてやることこそ必要なことである。

■ストライカーの育成
U-15 から特別にトレーニングする。代表にはストライカー担当のコーチがいる。練習、練習、練習の積み重ねこそ大切である。U-15,U-17,U-20 と同じ考え方、同じトレーニングを行うが量が異なる。

■大切にすること
家族、次にサッカー。そして選手にリスペクトされ、心が通った間柄であること。

3. クラブ ESTUDIANTES の概要（育成ダイレクター：アレハンドロ、フィジカルコーチ：ディエゴ）

■組織
現場では、育成ダイレクター、監督、コーチのほかにリハビリテーション棟に、医者、精神科医（心理学者）、栄養士、理学療法士（整骨士）、歯医者（週 2 日）、ソーシャルワーカーおよび全体のコオーディネーターがいて選手の日常や精神状態のケアをする。
年 1 回の健康診断を行う。治療費はすべてクラブが負担する。

■クラブの哲学
結果は 2 の次（勝利のみを重視しない）
攻撃的でディフェンスラインから組み立てる。

■トレーニングの形態（U-11,12,13 ある日のトレーニング）
サーキット形式の技術トレーニング。たくさんのコーチとコーチによるデモンストレーション、そして個別指導。

■選手を観る視点
技術。根性（奪い返すなど）。左右の足でプレーできる。同じ技術練習をするが年齢によって求めるスピードが変わる。

■トレーニング指導
監督とフィジカルコーチがコミュニケーションをとりながら行う。監督は技術的なトレーニングを行い、フィジカルコーチは負荷をコントロールしながら体力を高める。

■フィジカルの測定
6 月、12 月、1 月に実施する。フィジカルデータを貼り出し選手のモティベーションを上げる。

■タレント
技術のよさ＋フィジカルの要素

■U-12 のトレーニング
技術の質＋戦術的動き、フィジカルの要素。

急ぎすぎた指導にならないようにコーチの我慢が必要である。

■トレーニングスケジュール
40 分フィジカルトレーニング（コーディネーション含む）
40 分技術的トレーニング
9 軍（14 歳）～4 軍（20 歳）までメニュー配分は同じ。

■9 軍（19歳20歳）のトレーニング
（日）休み
（月）個人練習（技術的）
（火）技術 40 分、M-T-M
（水）紅白戦
（木）少し抑え気味にしてトレーニング
（金）セットプレー中心
（土）ゲーム

■10 歳で選手を選ぶとしたら
フィジカルの高さ、ボールタッチの技術

■日本人の留学生の傾向
10 歳から来れば技術、メンタルともに向上できる。
ユース年代からだとうまくいかない。理由は、判断が悪い、遠慮して自分を出さないなど悪い癖が直らない。日本の社会や人間関係の影響を受けてしまっている。

■勉強とサッカー
勉強ができない子どもは練習に出さない。禁止事項や約束事項を貼り出している。

4. クラブ GIMNASIA（ヒムナシア）の概要

■育成のシステム
外部から 50 人 2 つの寮に分かれて住み、3 つの学校に分かれて通う。
選手全員で 180 人から 190 人。

■選手選考
13、14 歳では 1 回の選考会のみでは選ばない。時期を 3、4 ヶ月ずらして行う。27 人くらいを選ぶ、それ以外に 3 人程度の余地を残す（最大 30 人）。
毎年 1 /2 は選手を入れ替える。

■トレーニングの組み立て
1.Without a ball
▽コオーディネーション・・・9 軍から 4 軍は毎日行う。
▽ウェイトトレーニング（自重、マシン。年齢が低いうちはフォームやスピードに重点。徐々に負荷を大きくする。
ホルモンの測定、身体観察を行いながら）

＊ホルモン分泌が始まっている子どもは筋トレを開始している（11 歳ころから）
＊筋力トレーニングについて
・U-12 、U-13 からスタート。早熟な子どもには U-11 から。フォームなど基礎的なものからはじめる。
・U-13、U-14 はマシンを使うが軽め。
・月曜水曜行う。ゲーム前の軽めのトレーニング。
・3 年計画の 2 年目のプログラム。
・コンセプトは、重さのトレーニングを動作に落とし込む。ウェイトを行ったらスピードある動きに変換する。
・パワーとアジリティを交互に行い、持久的能力（ランニング）も高める（＊インターバル）。

2.With a ball

▽技術トレーニング・・・基本技術からポジション、シチュエーショントレーニングへ。
▽さまざまなゲーム・・・技術と判断力を養成する。狭いエリアでのトレーニングが有効。トレーニングの目的に合わせた設定。
▽11 対 11 のゲーム・・・

▽特別なトレーニング・・・ポジション別トレーニング

■指導の考え方
年齢が低ければコーチングや個別指導を多くする。メニューが重要ではなくトレーニングの意図と指導の質が重要である。サッカーから外れないトレーニング、目的があってシンプルで指導の質が高いトレーニングこそ重要。選手が楽しみながら取り組めること。

■トレーニングのツールとルール
・よいサッカーを伝える。
・左右の足でトレーニング。
・いくつかのポジションで。
・ポジションを理解させる。
・トレーニングで規律を与える（ルール）ことと自由を与える（創造性を刺激する）ことを使い分ける。
・その場その場で個人を修正する。年齢が低ければ止めて特に丁寧に行い、サッカーを知る年齢になれば見守りながら。
・教え込む指導と見守る指導。
・多くのボールタッチ。
・テーマの年齢による量的変化とバランス（基本技術、さまざまなゲーム、11 対 11）
・シュート・・・ペナルティ内は 1 タッチで、ゴールから遠ければ止めて観て蹴らせる。

■13、14 歳のトレーニング
▽フィジカルトレーニング（15 分）
①コオーディネーション、エアロビック
②フィジカルトレーニングとその技術・・・自重、マシンフォーム重視。スピード、有酸素能力、柔軟性の向上

▽技術トレーニング（45 分）
①個人技術練習・・・トレーニング全体の 30%の割合
②さまざまなゲーム・・・トレーニング全体の 40%の割合
③11 対 11 のゲーム・トレーニング全体の 30%の割合・・

■14、15 歳のトレーニング
▽フィジカルトレーニング（15 分）
①コオーディネーション
②負荷をかけたウェイトトレーニング
③有酸素能力の向上
④負荷を掛けないフィジカル

▽技術トレーニング（45 分）
①個人技術練習・・・トレーニング全体の 20%の割合
②さまざまなゲーム・・・トレーニング全体の 50%の割合
③11 対 11 のゲーム・トレーニング全体の 30%の割合・・

■15 歳、16 歳のトレーニング
▽フィジカルトレーニング（15 分）
①コオーディネーション
②技術的フィジカルトレーニング
③戦術的フィジカルトレーニング・・・ポジションの動きのシミュレーションなど
④ウェイとトレーニングとボールを使ったトレーニング
⑤ウェイトトレーニングとスピードアクショントレーニング

▽技術トレーニング（45 分）
①個人技術練習・・・トレーニング全体の 20%の割合
②さまざまなゲーム・・・トレーニング全体の 50%の割合
③11 対 11 のゲーム・トレーニング全体の 30%の割合

■ゲームの翌日は上半身のパワートレーニングで疲労回復を図る。

■ポジション別トレーニング
週 1 回行う。攻撃的ポジションの選手も負荷を変えて守備させる。

■トレーニングの要点
▽プログラムを確立する
1. 段階的に行う（量）
2. 簡単なことからむずかしいことへ（質）
3. 子どもの（選手）レベルに合わせる

■フィジカル測定
1. ジャンプ力
2. スピード　10M、30M
3. 柔軟性

5.クラブ ROSARIO　CENTRAL の概要（育成ダイレクター：ガローニ氏、マルセロ氏）

■育成の考え方
準備が整ってから厳しい環境に入れる（＊急がずたっぷりと技術を習得させ 16 歳から厳しい環境に入れる）

■育成の加速化、前倒し
戦術を前倒しで教え込むようになってきているが、どのように止め、パスしシュートするかという基本技術を大切にしている。

■学び
システムは 9 軍（14 歳）から徐々に教える。自分のポジションも含め 2、3 のポジションを経験させる。いくつかのシステムを経験させる。ポジションのプレーを学ばせる。

■アルゼンチンの子どもたちの特性
小さい頃からサッカーを観ているから飲み込みが早い。ポジションのプレーのイメージを持っている。そこに有効な指導が加わる。

■メンタリティの大切さ
重要なのはメンタリティ、考えて自分の特性を伸ばすこと。競技場に入ったら勝利のメンタリティが必要。ピッチでは鬼になれ。

■10 歳の選手の選び方
よい技術を持っている。なにかひとつよいところがある。ダイナミック、技術が高い、身体能力、頑張れる選手。

■天才
7，8歳ですでに特別である。指導者はその子の才能に寄り添って教える。ピッチ外にも眼を配り教育する。

■トレーニング
走りながら考えるのはむずかしい。
トレーニングに邁進するのは努力であって犠牲ではない。
技術がなければ体力で勝負する。フィジカルトレーナーの責任がある。

■コーチの採用基準
ほとんどが元ロサリオの選手で、クラブの育成に関する幹の共有がある。
適材適所（君子の行う政）
育成コーチはプレッシャーがかかるポジションではないので少なくとも 1 年以上の長い眼で見て評価する。具体的にはシーズンの終わりの結果で評価する（＊リーグ戦であるので途中の勝ち負けを気にしないで指導できる）。

■コーチの仕事
・選手を育てること。
・勝ち負けの喜び悔しさを感じさせること。
・練習の場を提供する。
・トレーニングさせる。

・選手が目標に向かい自分で伸びていくことを助ける。

■選手への害
親の過剰な期待、過干渉が選手をだめにする。

6. バビーフットボール（Baby Football）

■サッカーと同じルール。ストリートフットボール(ポルトレーロ)に変わるものとして。
U-6～U-11　5対5

▽ROSALO　CENTRAL（クラブ　ロサリオセントラル）
・6 歳から 11 歳
・4 対 4。　25M×15M のピッチ
・子どもたちがゲームを楽しんである・・・ストレスを感じていない。
・たくさんのゲーム（量）
・サッカー（ゲーム）をする中で覚えていく。
・コーチの有効な関わり・・・かかわりすぎない、選手を励ます言葉がけ、さりげない指導。タイミング。
・コーチの年齢が高い・・・ベテランのボランティアコーチの存在。

▽COVER（コベールバビーフットボールクラブ）
150 から 160 人の会員。週 1 回の練習で 35 ペソ（約 1,000 円）、週 2 回で 55 ペソ（約 1,700 円）

▽バビーフットボール協会
FAFI・・・競技性の高い組織
CAFI・・・楽しむ要素が強い組織
▽リーグ戦・・・　U-12　は5対5、U-13 は6対6
シーズン・・・4 月から 11 月
ゲーム・・・土曜 9:30 から 15:00.
ゲーム時間・・・15 分ハーフ（5 分）

7. 育成年代のゲームの印象

ESTUDIANTIS　VS　・・・・

▽U−19（4 軍）
個々の選手のプレーに迷いがなく、やりきるサッカー。
走り切る、当たり切る、シュートを打ち切る、競り切る、仕掛け切る、関わり切る、攻め切る、守り切るサッカー。ゆえに激しくタフなサッカーである。その中で技術を発揮している。最後まであきらめない。

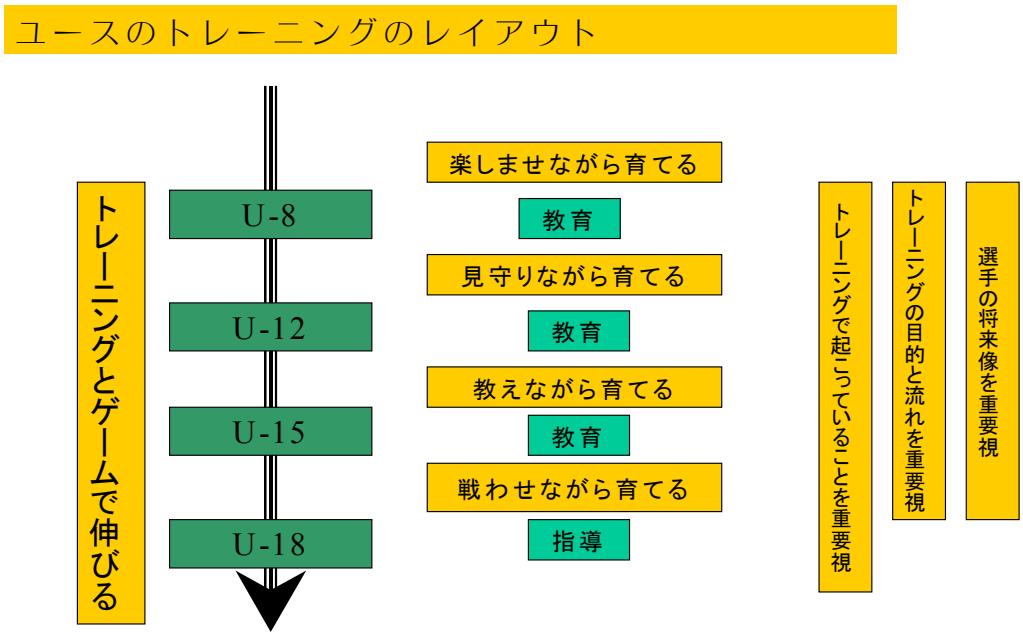
▽U-18（5 軍）
フィジカル的にもプレッシャーを掛け切れないのでまだ時間とスペースのゆとりはあるが、ボールに対する執着やゲームに対するメンタリティは強い。

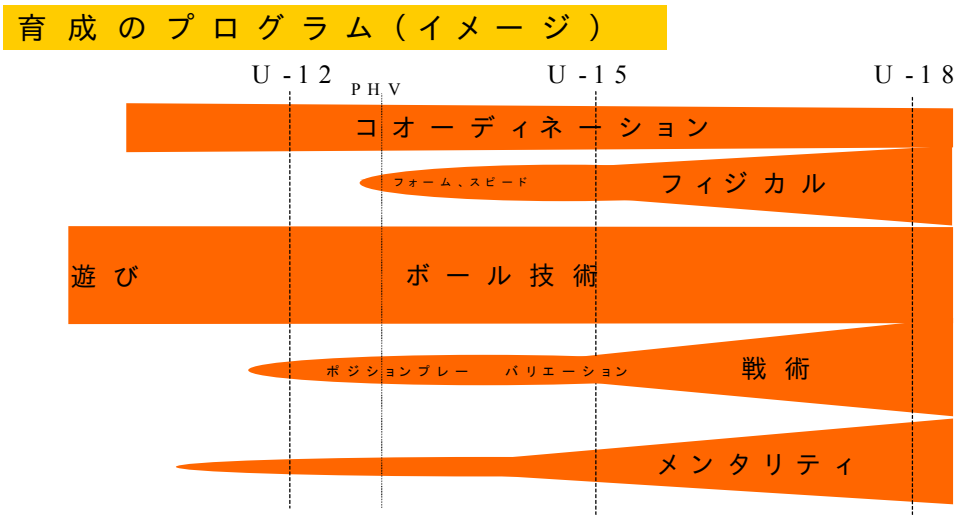
▽10 歳 11 歳

ゲームを伸び伸び楽しんでいる。個々のプレーに主張があり、簡単に倒れない。

コオーディネーショントレーニングの成果か？

8. その他(イメージ)





（おわり）

資料

アルゼンチンU−20監督・育成ダイレクター

ウーゴ・トカリ氏セミナー

まとめ　池谷　孝

Hugo・Tocalli

ＧＫとしてアルゼンチンリーグでプレー。プロクラブの監督等を歴任し 1994 年から 2007 年 12 月までＡＦＡの育成ダイレクター。その間ＦＩＦＡワールドカップＵ−20 で 5 回優勝、同時にフェアプレー賞を 5 回受賞。2007 カナダ大会監督

長期的視野に立った育成の重さ

唯一の成功の方法は長期的視野で育成すること。

育成のビジョンを確立する
育成の将来の展望を共有する

クラブには、将来の展望がなければ、育成をはじめ、すべてのことはできない。クラブ、協会、育成に関わる全員の協力･協働でなしとげられる。

育成ダイレクターの責務

・長期的視野に立った育成の意義や必要性を啓発、説明・説得してすること。クラブ首脳や周囲と緊密にコンタクトして、理解を得て長期的育成の環境を構築すること。
・配下のコーチに自分のサッカー観、育成の方針を伝えコーチの指導を評価すること。
・信頼できるコーチを採用し子どもたちの育成を守る。コーチの身分を守る。

通年にわたるリーグ戦の構築と育成

・選手個々やチームの成長の過程で定期的に正しく評価できるため、コーチも選手もプレッシャーを受けずにゆとりを持って育成ができる。
・拮抗した実力同士のチームの厳しいゲームが選手を育てる。
・Ｍ−Ｔ−Ｍが可能。
・高いモティベーションを保ってトップに上がるという目標に向かって進める。
・トーナメント敗退で終わるのは問題であり、大会自体が目的ではない。選手とコーチに大きなプレッシャーを与えてしまう。

よいサッカーのイメージを持つ、与える

コーチがよいサッカーのイメージをもつこと。よいサッカーのイメージを与える。よいサッカーとは技術に優れた選手がパスを回し時間をつくりながらゴールにたどり着くこと。
流動的で変化を起こすサッカー。トライアングルを保ちパスコースを２つ以上作る。スペースを作り使う。タイミング。

ポジションチェンジ。オーバーラップ。フィニッシュ。すべては技術に支えられた連動・連携。指導はマニュアルではない。コーチの哲学、学び、経験が必要。

Ｕ－16までの育成

ゲームで必要な技術を徹底的に教える。2 つ以上のポジションをこなせるようにする。さまざまな経験をさせる。チーム戦術はまだ重要ではない。

Ｕ－17からの育成

代表、クラブで必要な戦い方を身につける。さまざまな状況でプレーできるためのさまざまな戦術やシステムの経験やスキルを身につける。技術が完成されていなければならない。仲間と協力してゲームをする。

コーチは技術を徹底的に教える

ゲームに必要な技術を徹底的に教え込む。子どもの心理に配慮しながら、その場その場で徹底的に子どもたちのプレーを修正する。詳細な技術論とデモンストレーション、コオーディネーションを意識した繰り返し、シンプルなアドバイスが必要。基本を教えることであって判断を奪うわけではない。さまざまな状況に適応できるためのあらゆる準備を考えた指導が求められる。

見守る

「勝とう勝とう」ではなく「育てよう育てよう」。
若い年代に結果を求め、戦術を教えすぎると子どもは伸びない。育成の完成像から逆算して、子どもたちの学習や成長を忍耐強く見守る。子どもたちの才能に寄り添って技術を教え込む。感覚の領域に踏み込むようなことはしない。子どもの成長を楽しみに待つ。教育者であること。

子どもたちの学び

ゲームに必要な正しい技術を徹底的に習得する。左右の足での技術。さまざまなポジション、さまざまな状況でプレーできるための経験をトレーニングで積む。慌てないでよいサッカーをすること。

選手を選ぶ眼

多くの間違いがある。コーチのフィーリング。基礎技術の高い選手。クラブの必要とする選手。監督が必要とする選手。体が小さくても可能性を感じたら長い眼で見る。

日本の子どもたちのサッカーの印象

技術は高い。サッカーが前に前に急ぎすぎる。あわただしく時間が作れていない。常に同じ戦術で戦っている。ヘディングの技術が足りない。勝つことのみを考え蹴ってしまう。いつもゲームで何か一つ学ばせることが大切。

アルゼンチンサッカーの育成構造

・Ｕ－１１からＵ－２０まで 1 歳刻みのチーム。各クラブ各カテゴリー30 人を上限とする。トップに上がるのはＵ－１７，１８年代からおよそ９０パーセント。

・１９９４年トカリ氏がユースダイレクターに就任以来１３年間でＵ－２０ワールドカップ 5 回優勝・5 回のフェアプレー賞受賞。（Ｕ－１７では一度もないのは、Ｕ－１６年代まで技術習得のための育成に終始していることが、U-20 での優勝とフェアプレーに成果をあげている-ように推測される）

アルゼンチンの課題

結果重視の傾向による育成に及ぼす影響。
若いタレントの海外移籍による育成プロセスの前倒し。
若いタレントの海外移住。
ストリートフットボール（ポルトレイロ）の衰退による技術あるタレントの減少。
親の過干渉。

語録

・タレントは見つける、エリートは育てる。

・15 歳までは相手の分析は必要ではない。
・大会を目的ではなく手段として選手を育てトップに上げるというパノラマが必要。
・サッカーとともに人間性も育てることが最も大切である。
・コーチは子どもたちのお手本であること。自分のハートで子どもたちに接すること。
・サッカーに忠実であること。眼の前の子どもたちを教え向上させることにハートをもって集中すること。
・コーチ自身が一日一日成長しなければならない。選手自身も一日一日何かを学ばなければならない。
・ゲームでは冷静な頭と熱いハートを持って戦え。責任は監督がとるのだから、選手はいつもと同じように自分たちのやってきたよいサッカーをしよう・・・ゲームの前に・マニュアルではなく、気持ちをこめて育成にあたることが大切だ。
・育成は長期的視野でやること、それが唯一の成功の方法である。
・サッカーを好きな人たちは、どの国でも特別な選手が育ってくる事がより嬉しい。大会で勝つために選手を選ぶのではなく、よい選手を選び経験させトップへ昇格させる事が目的である。

まとめ・・・「勝とう勝とう」ではなく「育てよう育てよう」

■子どもたちに基礎技術を徹底的に身に付けさせ、よいサッカーをさせる

■コーチは、子どもたちの指導に必要な経験を積み勉強を続けなければならない

■育成責任者はよいコーチを採用し、環境をよりよく整備する

■サッカーとともに、子どもたちの人間性もクラブ全体で育てる

池谷様

ボカ・ジュニアーズ日本支部
カルロス・A・山本

お世話に成っております。
「2008 アルゼンチン研修レポート」何度も何度も読み返させて頂きました。
池谷さんのメールのタイトルは“間違え探し”でしたが、読めば読むほど“共感”し、今まで感じてきた自らの疑問に“納得”する事が出来ました。又、非常に興味深いのが、それがサッカーの現場にだけではなく、様々な分野で起こる両国の違いに共通しているという事です。

日本人の両親を持ちながら、アルゼンチンで生まれ、小学校 3 年生から高校 2 年まで日本で生活し、大学を現地で卒業した自分は今まで常に両国の違いについて、そして、自らのアイデンティティについて疑問を持ち、考えてきました。そして、今回サッカーを通して、自分のこの今まで持ち続けてきた“疑問”について、また新たな一つの答えを発見できた事に非常に嬉しく思います。自分が愛する両国が、互いの良き部分を学び良い方向へと発展していく事が出来れば、この様な特殊な環境で生まれ育った自分にとって、それ以上に喜ばしい事はありません。今回第一回となるアルゼンチン研修が、今後も第二回、第三回…と続いていけばと思います。

私は過去 5 年間、ボカ・ジャパンとして子供達の育成に関わるイベントや留学、遠征等の業務に携わってきました。その理由は非常に単純で、一つは自らのバックグラウンドを上手く活用したかった事と、二つ目がとにかくあれだけサッカーに対してクレイジーな国アルゼンチンで、現地人を驚かすような日本人プロ選手を輩出したい!そして、現地での日本人のイメージを変えてやりたい!という気持ちからです。

しかし、その中で何度もその想いやモチベーションを砕かれる場面に出くわしました。そのほとんどは、今回池谷さんが書かれていた 1.「選手のメンタル」、2.「指導者の意識・哲学」、3.「環境の違い」等に触れた時です。そして、1,2 のいずれとも 3 の影響を強く受けている事を感じるたびに「もうどうしょうもないな」と感じさせられてきました。しかし、07 年 12 月にトカリさんのセミナーにて日本の環境を変えようとする多くの方々に出会う事ができた事は、今の自分の大きなモチベーションに繋がっています。本当に有難う御座います。

今回、正直自分は指導のプロフェッショナルではありませんので、何か「ヒント」になるような提案は出来ませんが、自らが今まで現地の指導者等から聞いた話や見てきた事を池谷さんがお書きになった「アルゼンチン研修レポート」に付け加えさせて頂きたいと思います。

後、本当に話が長くすいません。熱くなるとこうやって文が長くなってしまうのが自分の悪い癖ですね。たびたび脱線するのもお許し下さい。

ボカ・ジュニアーズ育成部長　I 氏の話　「指導者の意識の共有」

アルゼンチンのクラブにはそれぞれ各クラブのイメージ、色があります。もちろん、それはトップの監督によって毎シーズン多少の戦術やプレースタイルの違いはあると思います。しかし、ボカはガツガツした、奪われたら奪い返すサッカー、リーベルはエレガントなプレーを意識したサッカー等、昔から「ボカと言えば…」、「リーベルと言えば…」というイメージがあります。これは、昔からそう誰かが決めたわけではなく、たまたま、そのクラブがスラムに近く、そのクラブを構成する選手達が別のクラブよりハングリー精神が強かった、元々クラブが学校を運営していた為、比較的教育レベルが高い子が集まった等というような、そのクラブの「育成哲学」的なものとは違う要因で出来たイメージです。これは、あまり格差社会では無い日本では少ないかもしれませんが、土地柄みたいなものは今後出てくるのかもしれませんね。地域総合型クラブ＝地域に根ざしている＝地域の色が出る(アイデンティティ)という事でしょうか。

しかし、トップの監督に就任すれば、必ずどこかでその部分（そのクラブのアイデンティティ）は意識すると思い

ます。クラブを支えるのが地元地域の過激サポーターである事を考えると当然かもしれませんね(それで、上手くいかなかったのがボカの元メキシコ代表監督でボカをクビになったラボルペ監督だと思います)。自分も現地で毎週末試合を観戦しに行っていた時(地元ベルグラーノ/2 部)は、下手な選手でも気持ちのはいった選手が好きでした。そして、トップの監督よりも長く勤務する育成部長は尚更なのではないかと思います。

そして、私がボカの育成部長の I 氏に会い、感じた事は、I 氏がそういうイメージを持ちながら、同時に具体的な選手の育成目標を持っていた事です。例えば、ボカでは、将来的にトップに上げられる選手(トップ監督との情報交換)、そして、その中でも将来的に欧州やメキシコ等に移籍させられそうな選手というのをチェックしており、そのような選手には欧州のクラブにも馴染めるような準備を事前に進めるそうです。

又、同時に各年代の育成指導者とも、年間の育成目標、それを月、週という単位で落とし込ませ、その日、その日の練習メニューの提出、選手の反応等を育成部長に報告させ、同時に I 氏も平日常に様々なカテゴリーの練習を視察、意見交換を行っています。これと同時にクラブによってはフィジカルの育成部長も存在し、各カテゴリーのフィジカルコーチとの情報交換を行っています。

このI氏はキューバでプロジェクト管理の勉強もしていた方なので、この様な細かな管理方法は現地で本当に上手くいっているのかは不明ですが、トカリさんが話していた育成理念の共有を目指す上での一つの方法なのかと感じました(ある意味、日本的?)。実際、池谷さんが書かれていたように、現地には年齢層の高い指導者も大勢おり、この様な管理方法に戸惑う方もいるかもしれません。この為、I氏が日々各カテゴリーを回りコミュニケーションを取るのも、こういう指導者がいるのを見越して、紙やデータだけではなく、アナログ的な対応も必要だと思っているからかもしれません。

バチスタ氏　「飛び級はしない」について

クラブによってだと思いますが、アルゼンチンのクラブでは年代別に 5 軍、4 軍、レセルバ(2 軍)、プリメーラ(1 軍)と続きます。そして、その中にはテルセーラ(3 軍)というカテゴリーが存在し、"ラ・エスペシアル“と呼ぶ人もいますが、ユース年代の様々なカテゴリーの上手い選手を招集して、別途トレーニングをするクラブもあります。基本的には年代別のカテゴリーに所属しますが、ある意味エリートの為の特別レッスン的な事をやっているクラブもあるようです。

選手発掘システム、多くのスカウト

クラブはもっとこの分野に予算を割く必要があります。アルゼンチンでは、FIFA の公式エージェントとは別に、選手の所有権を持つ”代理人”の存在が大きくなってきてしまっています。これら代理人は選手の将来的移籍金のパーセンテージを受け取るかわりにクラブに代わって様々な面で選手をサポートします(学費を支払ったり、生活の面倒を見たり)。ある意味投資ですね。

クラブ側からしてみれば、選手の年代が若ければ若い程、将来的にプロになる可能性がわからない為、それまで面倒を見てくれる代理人の存在は経済的な面でもメリットがる為、そういう意味でのリスクが少ない代理人付きの選手をユースにいれるクラブも結構あります。しかし、予想ではこれら選手は"中流"ではないかと思います。本当に良い"S 級” の選手は、ユースであってもクラブはお金を出して、代理人からその選手を買い取ります(もしくは、パーセンテージを持ち合う)。この為、代理人から選手を買っているリーベルとそれを拒んでいるボカでは、今抱える選手の質が異なってきています(リーベルは今、ほぼすべてのカテゴリーで上位を取っています)。この為、ボカは今、クラブ自体のスカウトの数を増やそうと考えているようです。

日本では、そういう問題はまだまだみられませんが、スカウトの数を増やすか、もしくは、全国の各地に選手選びの"目”があるキーパーソンと契約を結ぶというのも大事な事かもしれません。

メンタリティについて

日本人チーム(U-15)を現地に遠征させ、リーベルのユース(U-14) と対戦させた時の地元指導者(元サン・ロレンソ、ベレス指導者の M 氏)のコメント。遠征期間、日本人チームのコーチとして帯同してもらった。

試合前半で 5 対 0(日本人チームシュート 0 本)。試合に入る前から相手に気持ちの面で負けていた。そこで、ハーフタイム M 氏は日本人選手達に「お前らは日本を代表して戦っているんだ。最初から負けるつもりでピッチに入るんじゃない。片手にナイフを持ち、相手の心臓を抉り取るつもりでピッチに立て。サッカーはかかとをつけてするスポーツじゃない、常に次の動きがとれるようにかかとを地面から離せ!」と渇を入れた。
後半の試合では日本人チームも普段の動きを取り戻す。シュートの数も増え、試合終了後の結果は 6 対 1。

しかし、後半試合中の M 氏のコメントは非常にシビアでした。
『日本が世界でトップのレベルになる事は無い。世界のサッカーはテクニックの面を見れば、世界的にその差はどんどん縮まっている。フィジカル面では黒人には勝てない。これからのサッカーはアフリカの国か、黒人を有する欧州、ブラジル、中南米のような国々が強くなっていくだろう。しかし、そんな中で日本と同じく黒人がいないアルゼンチンが勝負していけるのは、この国のメンタルの強さが一番にあげられる。しかし、日本とアルゼンチンでは環境が違う。この子達を見てみろ。リーベルの選手達に「もし、この試合で活躍する事が出来れば、誰か一人に日本に行けるチャンスがもらえる“かもしれない”」と言っただけで、こいつらは死ぬ気で試合に挑んでくるだろう。しかし、日本から親に既にエアー代を出してもらって、アルゼンチンまで来させてもらっているにもかかわらず、相手チームに怯える彼らに何と言ってモチベーションを上げれば良い?きっと、何をあげても上がらないよ』
『日本人選手は、“ペロタ・ディビディーダ”(相手と自分の間にボールがある場面)でだいたいボールを奪えない。それは、すべてメンタルの違いだ』

これを聞いたのが、2007 年 3 月の遠征時でした。それまで、世界レベルのプロを輩出したい、日本のサッカーのレベルを高めたいという情熱で、日本の選手・チームをアルゼンチンに連れて行き、現地の指導者を日本に連れてクリニックやキャンプを行ってきた自分にとっては、非常に大きなショックでした。いくら頑張っても環境は自分には変えられない。無力感とも言える感情です。

しかし、その後、トカリさんのセミナーの経験と現地での新たな経験を通じて、少し前向きに考えられるようになりました。

■07 年 9 月アルゼンチンコルドバ州 3 部ラシン・デ・コルドバ所属の留学生の試合を観に行った時の経験。ユースリーグ戦の前のロッカールーム内での監督が選手に投げかけたメッセージ。

『皆、将来何になりたい?プロになってラシンの為に自分のすべてをかけて戦いたいか?それだけじゃないだろう?ボカやリーベルに移籍して、その先、ヨーロッパのビッククラブに移籍したくないのか?良い年俸をもらい、家族に家を買ってやり、ポルシェやフェラーリに乗りたくないか?まぁ、目標は人それぞれだ。しかし、もしそういう高い目標を目指すなら、今日のヴィジャサライ戦(ヴィジャサライは州リーグ登録チームで所有するスタジアムもボロボロの貧乏クラブ)をバルセロナやミランだと思って試合に挑め。そして、相手の選手もロナウジーニョやメッシ、カカだと思って戦え!こういう一つ一つの試合にそういう気持ちで挑まない選手は決して上にはいけないだろう。お前らならやれる。胸を張って今日の試合に挑んで来い!』

■08 年 3 月 8 歳の従兄弟のバビーフットの試合と留学生 16 歳の試合を見学しに行った時に感じた“すべてがトップと同じ、もしくはミニチュア版である”という感覚。

これらを通じて、自分は子供達、選手達を「その気にさせる」、「その気にさせてしまう」環境、演出(?)、が大事なのではないかと思いました。池谷さんがおっしゃっていたように指導者の２極化、これは、子供達が“自分で自分を伸ばす力”を伸ばす機会を奪い、試合であれば、自らのために勝つのではなく監督の為に勝つという、おかしな状況を作ってしまうと思います。これは非常におかしな事で、自分も日本のジュニアやユース年代の試

合を見に行って、よく感じます。何かサッカーの試合を観にきているのに、サッカーの試合でないような不思議な感覚です。

ボカの指導者に帯同して動く経験も多かったので、実際に本当にプロになれるのはごくわずかで、「選手は生まれてくる」という事も理解しています。しかし、プロになるか？ならないか？がすべてではなく、「少なくとも“その気になって”一生懸命目標に向かって頑張ってみた」という経験を子供達に持たせる事が何よりも大切なのではないか？(どうやって夢や希望を持たせるか？) と今は感じています。そして、その中で生まれてきた選手には、それなりの道を用意してあげれば良い。自分が今までやってきたボカのセレクションや遠征、クリニック、留学等、子供達と関わる時間はまちまちですが、その限られた期間内でどれだけその気にさせてしまうか？というのが今後の一つのバロメーターにしていこうと思っています。

アルゼンチンでも日本でも様々な問題があると思います。アルゼンチンでサッカーは、多民族国家、宗教の違い、格差社会等の様々な違い(問題)を超えて、国民を一つにするアイデンティティであると同時に、下流階級の人から見れば、一世代でどうにか頑張って中流階級に入れるか？入れないか？という厳しい格差社会の中で、サッカーは唯一下流階級から上流階級へとのし上がれる希望(アルゼンチンドリーム)です。
そういう意味でもサッカーは**特別な存在**なんだと思います。

そして、日本の社会を見ても、「入るのに難しいが、卒業するのは比較的楽な大学(学校の仕組み)」、「周りの評価で自分の価値を決める人達の多さ(Yes マンの多さ)」、「手の届く範囲の夢で満足してしまうムード(大きな夢を持とうとしない人達)」、「ゆとり教育と詰め込み教育(指導の二極化？)」等、様々な社会現象がそのまま日本のサッカーに影響を与えていると思います。

そんな中で、山下さんや池谷さん等が日本の育成環境を変えようと行われている活動は、このような日本社会の中でサッカーが**特別な存在(良い意味で異質)**となる事を意味するのではないか？と思います。

本当に心からJリーグアカデミーの活動を応援しています。これからも我々の希望の星であって下さい。
Muchas Suerte!!!

ボカ・ジュニアーズ日本支部
カルロス・A・山本